

目 次

第 16 講	第 15 講	第 14 講	第 13 講	第 12 講	第 11 講	第 10 講	第 9 講	第 8 講	第 7 講	第 6 講	第 5 講	第 4 講	第 3 講	第 2 講	第 1 講
隨筆 (1)	日記 (5)	日記 (4)	日記 (3)	日記 (2)	日記 (1)	物語 (5)	物語 (4)	物語 (3)	物語 (2)	物語 (1)	説話 (5)	説話 (4)	説話 (3)	説話 (2)	説話 (1)
.....
62	58	54	50	46	42	38	34	30	26	22	18	14	10	6	2

文語文法要覽	第 30 講	第 29 講	第 28 講	第 27 講	第 26 講	第 25 講	第 24 講	第 23 講	第 22 講	第 21 講	第 20 講	第 19 講	第 18 講	第 17 講
.....	和歌 (5)	和歌 (4)	和歌 (3)	和歌 (2)	和歌 (1)	評論 (5)	評論 (4)	評論 (3)	評論 (2)	評論 (1)	隨筆 (5)	隨筆 (4)	隨筆 (3)	隨筆 (2)
.....
122	118	114	110	106	102	98	94	90	86	82	78	74	70	66

第1講 <<< 説話 (1)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

世の常にある人のいみじく手づつに心づきなく見ゆるは、不覺に思慮なき者を人前に取り出づることは、事かくともすまじき事ぞかし。さしあたりて人なき時はよくよく教へ戒めて、有るべきやう言ひ知らせて、とり出だせるに、そのうへ猶あやまちをも僻事をもし出づるは、さ思ひつることとて言ひ甲斐なければ、さてこそあれ。それを内にては言ひも教へおかで、人前にて声をたててさいなみ腹立つこそ人目見苦しく、すべてその日の事もさむるこちすれ。それに従者もあひ添へてつきつきしくのべしじめあつかひをる事、主に劣らずにくけれ。「客人の前には犬をだにもいさかふまじ」とこそ文にも見えなれ。まして人を勘当し興をささまむ事、有るべきにあらず。かやうの事を見るには、よそにても汗あゆること多かり。人々寄り合ひてさるべき遊びなど。せむには、たとひ身にとりて安からず口惜しき事にあたりとも、構へてその日のさはりあらせじとはからふべきなり。「その人の有りて、しかじかの折、事さめにき」と言はるる、口惜しき事なり。しかれば、行かぬさきよりはからひ、あしかるべき所へはさし出でぬにはしかじ。

〔十訓抄〕

問一 波線部 a～f の「に」の中で、格助詞の「に」はどれか。適切なものをすべて選び、記号で答えよ。

- a 手づつに b 文にも c 有るべきにあらず
d せむには e 口惜しき事に f 事さめにき

問二 傍線部①「手づつに心づきなく見ゆるは」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 相手に対して無遠慮だと感じるのは イ ただたどしくて危なげに見えるのは
ウ 手荒で不親切に感じられるのは エ 不調法で不愉快に感じられるのは
オ 自らの責任でもてなそうとしないのは

問三 傍線部②「事かくともすまじき事ぞかし」とはどういう意味か。何が「すまじき事」なのかも含めて、現代語訳せよ。

問四 傍線部③「人なき時」、⑤「人前にて」の「人」はそれぞれどういう人を指すか。その説明として最も適切なものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 家族 イ 気のきいた召使い ウ 客人 エ 家来たち オ そばにいる人

問五 傍線部④「さてこそあれ」とは「そのままにしておきなさい」ということだが、具体的にどういうことか、説明せよ。

問六 傍線部⑥「すべてその日の事もさむる」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア その日の手はずがすべて狂ってしまう イ その日までの出来事が納得できる
ウ それまでの準備のほどがわかってしまう エ 当日の失敗の原因をつきとめる
オ 当日のもてなしまでがつまらないものになる

問七 傍線部⑦「よそにても汗あゆること多かり」とあるが、このように言う筆者の心情を表す語句の組み合わせとして最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 怒り・共感 イ 恐怖・不安 ウ 軽蔑・冷淡 エ 嫌悪・羞恥 オ 心配・同情

問八 傍線部⑧「構へてその日のさはりあらせじとはからふべきなり」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 相手とよく相談してその日の行事に差し障りのないように努めなければならない
- イ 相手の出方をよく考えてその日の遊びに負けないように計画すべきである
- ウ 決して当日の遊びに不都合を起こさせまいと心づもりをすべきである
- エ じゅうぶん気をつけて予定の日に行事が行われるようにとりはからわねばならない
- オ 準備を整えてその日の行事に支障がないようにとりはからわねばならない

〔 〕

問九 傍線部⑨「あしかるべき所へはさし出でぬにはしかじ」とはどういう意味か。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 相手が迷惑するような家へは訪問するものではない
- イ 自分の身に危険なことが起こると予想される所へは出て行くべきではない
- ウ 他人を不愉快にさせるような所へわざわざ出かけるのは愚かしいことだ
- エ 不都合なことが起きそうな所へは初めから顔を出さないのに越したことはない
- オ 悪い人間が集まっている所へ行って同じような人間だと誤解されることは避けるべきだ

〔 〕

問十 筆者は人々にどのような態度をとるように忠告しているか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 他人と交際する時は、自分の感情を抑え、他人の気持ちを思いやらねばならない。
- イ 他人の失敗であっても、それを責めずむしろ自分の責任であるかのように反省しなければならない。
- ウ 他人の前では従者に対してやさしい態度をとり、気持ちのやさしい人間としてふるまわねばならない。
- エ 従者に不満があっても感情をあらわにせず、他人に対しておだやかに接しなければならない。
- オ 不愉快なことがあっても、他人に不快な気持ちを抱かせないように自己抑制しなければならない。

〔 〕

① 重要古語

世Ⅱ古語では「期間」「一生」「現世」「社会」「天下」「時流」「世評」「俗世間」「男女の仲」など多義であるが、ここでは「世間」が適切。「世の常」で「世間によくあること」の意味。

いみじくⅡたいそう。形容詞「いみじ」の連用形。

心づきなくⅡ気に入くない。形容詞「心づきなし」の連用形。

見ゆるⅡ感じられる。動詞「見ゆ」の連体形。

やうⅡ「様式・手本」「形・姿」「様子」「事情」「方法」「道理」などの意味

があるが、ここでは、「様式・手本」が適切。

猶Ⅱやはり。依然として。

僻事Ⅱ道理に外れたこと。間違い。

さⅡそのように。一文字だが「そう」という意味を表す副詞である。「さ思

ひつる」で「そうなると思っていた」というほどの意味。

つきづきしくⅡふさわしい。調和がとれている。形容詞「つきづきし」の連

用形。

にくけれⅡ憎たらしい。見苦しい。形容詞「にくし」の已然形。

くだにⅡくだけでも。最低限のものをあげて、ほかに程度の重いものがある

ことを言外に示す副助詞。「くだにも…(打消)」で「くさえも…ない」と

いう意味。

文Ⅱ「書物」「手紙」「学問」「漢詩」などの意味があるが、ここでは「書物」

が適切。

かやうⅡこのよう。

さるべきⅡしかるべき。

安からずⅡ心穏やかでない。「平穏である」という意味の形容詞「安し」の

未然形に、〈打消〉の助動詞「ず」が付いたもの。

口惜しきⅡ残念だ。無念だ。形容詞「口惜し」の連体形。

さはりⅡ支障。差し障り。

くしかじⅡく及ばないだろう。「及ぶ」という意味の動詞「しく」の未然

形に、〈打消推量〉の助動詞「じ」の付いたもの。

② 内容のポイント

人を召し使う主人に対する訓戒である。

従者（召し使い）は失敗することがあるが、そもそも無遠慮な人物を人前に出してはいけない、万が一従者が失敗しても、人前で叱っては興ざめになるのでそのままにしておけ、などの戒めが記されている。

③ 古文常識

○遊び：中古から中世にかけては、「遊び」といえばほぼ「管弦の遊び」、す

なわち笛や琴などを演奏する、音楽の催しを指した。「行楽」「狩猟」など

の意味を表すこともあるが、基本的には管弦の遊びだと思つてよい。

池や川に船を浮かべての、貴族たちの華麗な管弦の遊びの風景は、さま

ざまな物語や随想にも数多く描かれている。

④ 出典紹介

『十訓抄』は鎌倉時代中期の説話集。編者は六波羅二藤左衛門入道との

説が有力。建長四年（一二五二年）成立。三巻からなり、約二百八十の説

話を収める。若者に向けて、善悪の道などを示した啓蒙書。

⑤ 説話の紹介

説話とは、人々の間に語り伝えられてきた話をいい、神話、伝説、昔話、

世間話、仏教話などが含まれる。体験的な事実としてではなく、人から聞いた

伝聞として語られるところに特徴がある。説話を集めたものを「説話集」と

いい、現存する最古の説話集は、平安時代初期に成立した『日本霊異記』

とされている。

代表的な説話集

平安時代 『日本霊異記』（景戒著）

鎌倉時代 『宇治拾遺物語』（編者未詳）

『古今著聞集』（橘成季編）

『今昔物語集』（編者未詳）

『発心集』（鴨長明著）

『沙石集』（無住一円著）